

日常会話の中で、不用意に使ってしまったいがちな外来語。新聞やテレビをはじめとして、外来語は世の中に氾濫しています。今回は、教育現場において、外来語が浸透してしまうことの危機感を、辰濃先生が訴えています。

「外来語」にももの申す

「去年スタートした校内外清掃運動は、今年ますますパワーアップする。市民運動のリーダーと協力するシステムもできて、汚れきつた北内川をチェック、川のスポット清掃にもチャレンジを続け、近在住民から感謝されるパワフルなパフォーマンスをなすとげた。ゴミのトラブルに悩む住民からは、清掃用グッズの寄付があり、清掃運動はさらにチャレンジのパターンをふやし、レベルアップをはかる方針だ。運動のキーワードは『ファイト・アンド・チャレンジ』」

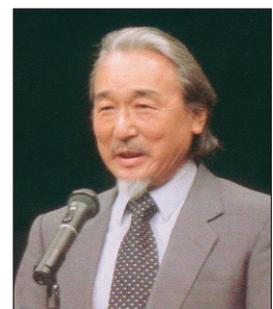
お断りしておくが、これは架空の記事だ。どこを探しても、こういう記事はない。ないけれども、この記事の中で、カタカナで書かれている外来語はすべて、実際の「学校だより」「学級通信」などで私が拝見し、採集したもののばかりである。採集してみると、かなりの数になる。そのことをいいたくてあえて意地の悪い記事を創作した。まずその事情をわかっていただきたい。

外来語の多用はいまや、世の趨勢だ。日本

を代表する放送機関が、日本語でない文字を使ってNHKと称している。日本を代表する農業団体がJAを名乗り、日本を代表する鉄道の会社がJRを名乗る。本当はきわめて異常なことなのだが、それが異常と思えなくなっている。新聞やテレビも、おびただしい数の外来語を世間にまきちらすことに加担している。そして教育の現場もまた、世の趨勢に染まってしまうことに私は危機感を持つ。

一切の外来語を使うべきではないなどというつもりはない。パソコン、地デジのことを日本語で言い表すのはもはや難しいし、マス・メディア、ボランティア、エコロジーなどの外来語も、もう言い換える時期が過ぎってしまった感がある。

ただ、教育の現場は、新聞・放送と共に、カタカナで表現される外来語の氾濫を食い止める砦の一つであってもらいたいと願う。「チャレンジする」「オープンする」「チェックする」といった外来の動詞を不用意に使う



●たつの・かずお
朝日新聞社入社。ニューヨーク支局長、東京本社社会部次長、編集委員を経て、論説委員。「天声人語」を13年間にわたり執筆。平成6年朝日カルチャーセンター社長を経て、現在著述業。

ことに慣れた子どもたちは、次第にそれが当然と思い、「きれいな日本語を使う」ことにうとくなるだろう。たとえば「チェックする」を日本語でいえば「調べる・食い止める・制御する・検査する・照合する」などのほか、たくさんの方がいる。そういう古くからの日本語の使い方を投げ捨ててしまっているものかという気持ちが私にはある。

国語学者大野晋氏の説によると、基礎的な日本語のうち、長く使われているのは動詞で、逆に副詞や感動詞は寿命が短いそうだ。古語辞典にでてくる「遊ぶ・会う・争う」などの動詞はいまも生きています。ただ、そういう寿命の長いはずの動詞も「オープンする」「チェックする」といった外来語の使用がさらにはやるようになると、次第に衰弱し、日本語の根幹がゆらいでしまうおそれがある。

『「聞く」って書いてあるけど、これ、オープンのことかな』なんていう世代が現れる時代がくるのだろうか。